

10人のツアラアトの人たちをきよめる

ルカ福音書17:11-19

17:11 そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。
 17:12 ある村に入ると、十人のツアラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、
 17:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。
 17:14 イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。
 17:15 そのうちの一人は、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、
 17:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。
 17:17 そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。
 17:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。
 17:19 それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) ツアラアト（重い皮膚病）はどんな病ですか。
- (2) 生まれながらの人には、あわれみを求める心がないのはなぜですか。
- (3) イエスのもとに戻って来たサマリヤ人の信仰は、他の九人の信仰と何が違いますか。

【解説】

(1) サマリヤとガリラヤの境を通る

ユダヤ人たちが祭りに際してエルサレムに上る時に、ガリラヤからユダヤに行く途中にサマリヤという地方がある。そこを通らないで、ガリラヤとサマリヤとの境を通って東に向かい、ヨルダン川を渡ってその東側を川に沿って南下する。

そしてサマリヤの地帯が終わったころ、またヨルダン川を西に渡ってユダヤに入り、エルサレムに上る。これが普通、ユダヤ人たちがたどるエルサレム上りのコースである。それはユダヤ人とサマリヤ人とは非常に対立した、具合の悪い関係にあったからである。イエスも今そのコースをとってエルサレムに上って行こうとされている。



(2) 重い皮膚病（ツアラアト）の人たち

ところで、主イエスはわざわざサマリヤとガリラヤの間を通っておられた。ユダヤ人ならガリラヤの地方を通るであろうし、サマリヤ人ならサマリヤの地方を通るはずである。しかし、主イエスがそこを通られたのは、そこにしか住んでいない人々に会うためであった。

はたせるかな、ある村に入られると、そこに重い皮膚病（ツアラアト）の人たちがいた。そのうち九人はガリラヤの人、つまりユダヤ人である。あとの一人がサマリヤ人であった。彼らは、いずれも彼らの仲間からは仲間はずれにされている人たちであった。

重い皮膚病（ツアラアト）ということで、それぞれの集団から追い出され、同病相憐れむ生活をしていた。

なにもわざわざツアラアト患者のいる村まで出かけて行く必要はないように思えるのに、主イエスにとっては、彼らもまた神のあわれみの対象であった。

この世に生を受けている人で、神のあわれみの対象でない人など一人もいない。

どんな出生の仕方をしようが、どんな環境で成長しようが、どんなに人から忌み嫌われる病気を持っていようが、神のあわれみの対象でない人など一人もいない。

主イエスがわざわざツアラアト患者の住んでいる村に来られたということが、それをあかししている。



(3) あわれみを求める低い心

①あわれみとは：

その村へ主イエスは来られ、その十人のツアラアトの人々が主イエスを見つけると、遠い所から大声で主イエスに訴えた。それは、律法の規定で、健康な人の近くに来ることが出来なかったことと、このチャンスを逃したら、もう二度といやされる見込みはないと思ったからである。

「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」

この叫びはただあわれみを求めることにつきていた。ただこのみじめな者をあわれんで下さいという叫びであった。あわれみは、与えられる価値のない者が与えて頂く。これがあわれみの出来事である。あわれみとは、救われる資格のない者を救って頂く、与えられる資格のない者に与えて頂く、そのような一方的な出来事である。

②高慢な心：

傲慢な人間はあわれみを受けることを嫌がる。あわれみを受けるような「みじめな者」でありたくない、あわれみを受けるくらいならいっそ死んだ方がいいと考える。そんな心が生まれながらの私たちの自我の中に強くある。

あわれんでやる側には立ちたいが、あわれまれて生きていくような「みじめな者」にはなりたくない。そういう心がありはしないか。自分がこんなふうにあるのは不当ではないか。だからこんな状態から救えという、これはどこまでも権利の主張である。あわれみを求める態度ではない。むしろ不当をなして、その不当を取り去れと言い立てるそういう求めである。それは、人が人に対して求めることはできても、神に対してすべき求めではない。そんな求めをしているところにおいては、その求めは聞かれない。

このツアラアトの人々の求めはあわれみを求める求めである。あわれまれるしかない者、そこにこのみじめさを私の当然な出来事として受け取っている姿がある。そこにこのツアラアトの人たちの「低い心」の姿がある。

(4) 行きなさい。そして祭司に見せなさい

主イエスは、自分の方からいやしを求めて来る人に対しては、ただの一度もそれを拒まれるようなことはなかった。この時も、主イエスはすぐにいやしておやりになり、そのことを次のように彼らにお告げになった。

「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。

これは、旧約聖書のレビ記14章に記されている規程によると、ツアラアトが治った場合、祭司の所へ行って、いやされたことの認定を受けてはじめて社会復帰が出来るからであった。

このツアラアトの人たちは、当時の世界ではまことにみじめな存在であった。この病気になるると町の中に住むことが出来ず、町の外、門の外あるいは村の外に隔離された。伝染病として隔離されることであった。汚れた病気だ、罪の結果であるということで、病気に加えてさらに宗教的、精神的に非常な重荷を負わねばならない病気であった。この病人に触れる、あるいは近づくとその者が汚されるということで、親しい者も近寄ってくれない。また近寄ろうとしてもおきてのゆえに近寄ることができない。

主イエスは、彼らがきよめられたことを前提として、祭司の所へ行けとおっしゃった。彼らは皆それを信じて行動を開始した。そして、歩きながら、長年の悩みであった重い皮膚病がきよめられたことを知って、喜んだであろう。

しかし、そのうちの一人は、自分がきよめられたことを知ると、すぐ「主イエスのもとに引き返して来た」。彼は先に主に助けを求めた時に出した大声よりもっと大きな声で神をほめたたえながら主イエスの所に帰って来た。

この人は、主イエスの足元にひれ伏し、自分が主の恵みを受けたことを言い表して、心からの感謝をした。もちろん、他の九人もいやしを経験したことを喜んだだけでなく、感謝をしたことであろう。しかし、この一人の人の感謝と他の九人の人の感謝とは質が違っていた。「他の九人の人の感謝」は、ただ自分のうちに仕舞っておくにすぎない感謝であったのに対して、この「一人の人の感謝」は、それが「神の恵みによるもの」であるということを表す感謝であった。



(5) 神をあがめる信仰

だから、主イエスはこの人にこう言われた。

十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。

いやされた時、それはだれであっても嬉しい。しかし、それでおしまいであれば、それは「ご利益信仰」以外の何ものでもない。この世の宗教はそのほとんどが、皆これである。しかし、キリスト信仰がこの世のご利益信仰と違う点は、神のあわれみのみわざがそこでなされる時、それで自己満足してしまうのではなく、神をあがめるということにある。

(6) 生きた本当の信仰を持ったサマリヤ人

主イエスのもとに引き返し、感謝をささげる時、イエスは「新たな祝福」で満たして下さる。「あなたの信仰が、あなたを直したのです」ということは、他の九人はツアラアトがきよめられただけだったが、10人目の人は罪からも救われたことを示している。生きた本当の信仰は、「あわれみのみわざをして下さった方」に目を留め、その「お方」が私たちに「滅びゆく運命から救って下さるお方、救い主（メシヤ）である」ことを啓示されることにある。